

王命で娶られた忌み姫は氷の魔法騎士の子を身籠りたい

一 忌み姫の結婚

フロレーシア王国は大陸の北端に位置する雪と氷に覆われた国である。国土の大半が白銀の雪原に覆われており、一年を通して雪が降り止むことはない。

この厳しい環境の中で生き残るため、王国では魔法の力が重視されてきた。特に貴族階級の者たちは古くから魔法の素養を持ち、親から子へとその能力が代々受け継がれる。

王国の立地によるものか、氷の魔法に長けた家系が多いのも特徴であった。

中でも王家は代々「氷の精霊」の加護を受け継ぐ家系であり、その加護を得た者は強力な魔力を持つとされる。王国の象徴でもある氷の精霊の加護は正統な王権の証であり、フロレーシア王家の血筋を示すものである。

成人の儀を迎えると同時にシエルは結婚することになった。

長く柔らかいホワイトブロンドの髪、雪のように白い肌、瞳の色はアイスブルーと、彼女の容姿はとても美しく整っていた。その上、まだ幼さが残る愛らしさも持っていたのだが、残念なことに彼女は自らの美しさに気が付いていなかった。

それだけでない。彼女は、生まれてから一度も暖かい家族を知らないでいた。シエルは父親である現国王が愛人との間に作った子供だった。

愛人だった母は側妃として迎え入れられるほどの地位を持たず、王宮に居場所を持たない存在であった。シエルは王宮から離れた屋敷で母の顔も知らずに育ち、その母は彼女が生まれてすぐになくなってしまったと聞かされている。

そんな彼女が捨てられずに姫として育てられているのには理由がある。

氷の精霊の加護を受け継いでしまったからだ。

精霊の加護は親から子へと受け継がれるもので、前の氷の精霊の加護の持ち主はシエルの父親である国王、オスカー・フロレーシア。

王国にとつて重要な加護を持つ娘を捨てるわけにもいかず、育てていたに過ぎないのだ。

王妃たちからは忌み嫌われた存在。実の父からも愛情らしいものは受けていない。

それでもシエルにしてみれば立派な父親。姫として何不自由なく育てられたことに違いはない。

——例え、愛されなくても。

今日は花嫁として、何年かぶりに屋敷から外に出る日。

結婚式という晴れの舞台。婚礼の儀式のために外に出ることが許されたのである。

白いウエディングドレスに身を包み、ベールを被った姿は神秘的だ。

まるで天使のような美しさを持つ彼女の姿を見ることができるのは、儀礼を執り行う神父と使用

人と護衛の騎士たち……そして、花婿^{はなむこ}だけである。姫の結婚式なのに参列者はとても少ない。

結婚相手となるのは公爵家の子息であり、魔法騎士でもある男——グラッセ・ラッセル。

年齢は二十四歳で、シエルよりも六歳年上。

この国でも有名な騎士団に所属しており、若くして数々の武勲^{ぶこん}をあげて昇格を果たした評判の人物だそう。また、王立学園においても常に成績は上位で、首席で卒業したといわれている。

しかし、シエルはその男のことを、表面的な情報以外に何一つ知らない。

何故なら今まで会って話をしたこともない赤の他人だったから。

だから教会の祭壇^{さいだん}の前でようやく花婿との対面を果たすことになる。事前に顔合わせさえもさせて貰えなかったので不安しかなかった。

夫になる男がどんな人なのか知らないまま過ごす時間はとても長く辛いものであった。

(私の旦那様になる人)

この白いベールを捲り上げた先にある未来の夫を想像するだけで胸が高まる。

祭壇^{さいだん}の前は静寂^{せいじやく}に包まれていた。外の雪がしんと降り続ける音さえ、ここまでは届かない。

白を基調とした装飾の中でシエルは、ベールの奥からぼんやりと周囲の光景を眺めていた。

目の前に立つ神父が祝詞^{のりと}のような声で儀式の言葉を紡いでいる。

隣にはまだ顔の見えない「夫になる人」の気配がある。時折、布越しに感じる視線と、同じ空気を吸っているという事実だけが、シエルに彼の存在を感じさせていた。

(この人が私の旦那様)

その想像に胸が高鳴る一方で恐怖もあった。

優しくて、頼れる人であれば。自分を見下さず、道具のように扱わず、一人の女性として接してくれる人ならば。そんな希望が祈りのように胸の内に渦巻いていた。

「グラッセ・ラッセル、貴方はこの女性を妻とし、生涯変わらぬ愛を貫くことを誓いますか？」

「はい」

静かな教会に、花婿の声が低く響く。

その声音は落ち着いており、耳に心地よい余韻を残した。

「シエル・フロレーシア、貴女もこの男性を愛し、支え続けることを誓いますか？」

「……はい」

シエルは少し緊張しながらも透き通るような声で誓いの言葉を述べた。

その声は震えこそあれど、確かな意志が込められているようだった。

「それでは誓いの口づけを交わしなさい」

神父の厳かな声を聞きながらゆっくりと近づいてくる足音を待つ。

コツンと響く靴の音を聞く度に心臓が激しく脈打つような感覚を覚えた。ドクンドクンツと全身を巡る血流の流れすら聞こえる気がするほどに緊張しているようだ。

ボールに手がかかけられ、そつとうなじの方へと押し退けられる。目の前に現れた男の姿を見た瞬間に、シエルは息をすることすら忘れてしまうほどの衝撃を受けることになった。

グラッセ・ラッセルは背が高くスラリとした体型をしていた。

その体を包んでいるのは魔法騎士団の中でも上級階級の者にもみ許されたものだった。

深い青を基調として、銀糸で繊細な紋章が刺繍されており、肩口には魔法階位を示す徽章が静かに輝いている。

青みかかった銀色の髪は短く切り揃えられており、鼻筋もスツと通っている。精巧に作られた人形のように整った顔をして、美形という言葉以外に当てはまる言葉がない。

しかしエメラルドグリーンの瞳はどこか冷たく感じられるものだった。

彼は何も言わずただじっと見つめてくるだけなので居心地が悪くなり、シエルは目を逸らしてしまふ。しかし、肩を掴まれ正面に向かされた上に顎を持ち上げられ、視線を合わせるようにさせられた。間近に迫る男の冷たい眼差しに、体が強張る。

そして背の高い彼がシエルの身長に合わせて身を屈めるとその唇を重ねてきた。

生まれて初めてのキスは触れるだけの軽いもの。

長いようで短い誓いのキスの時間は終わりを告げる。離れていった彼の端正な顔を見上げれば、少し照れ臭そうな表情が垣間見える。だが、すぐにその表情は消え失せてしまった。

次に、用意された指輪の交換をした二人に対して、神父が告げる。

「それでは最後に儀式を行い、夫婦となるのです」

その言葉にシエルは——そしてグラッセも——気まずげにする様子を見せたのだが、それも一瞬のことで再び視線を合わせて互いに手を取り合い、そのまま奥の部屋へと向かった。

『最後の儀式』が何であるかを知らないわけではないのだが、いざその時になると恥ずかしさが込

み上げてくる。

この国の王族は、結婚の儀の際に初夜を神に見てもらいながら行うことを義務付けられているのだ。それは次世代を確実に残し、子をなさない結婚——白い結婚を防ぐためのもの。

古くから続く神聖な風習だ。王妃は、六つ年上のシエルの姉である王女をその儀式の日に授かったと噂されている。それにもかかわらず、なぜか姉は「氷の精霊の加護」を受け継がなかった。

これまででは、第一子が受け継いできたこともあり、皆困惑したという。

ある者は言った。加護を継ぐには、母親、または父親の素養が影響するのだと。

奥の部屋に足を踏み入れると真っ白な壁と天井が目に見え飛び込んできた。

中央には純白の寝台が静かに佇んでいる。

神父、護衛の騎士、使用人たちの視線が見守る中、シエルはウエディングドレスの繊細なレースに包まれたまま、寝台にそつと横たわった。

儀式の間、花嫁は天井を見れば何もする必要はないと教えられていたが、シエルの心はざわめき、迫りくる出来事から意識を逸らそうと必死だった。

けれど、心の準備が整わないまま、時間は容赦なく進んでいく。

「姫、失礼します」

「は、はい」

グラッセの低い声が静かな部屋に響いた。

夫となったばかりの彼はシエルにとって知らない男だった。

今日初めて会ったその人これから身体を委ねなければならない。その事実にはシエルは怖くなってドレスの裾をぎゅっと握りしめた。

グラッセが神父から渡された香油の瓶を開けると、甘くほのかに花のような香りが部屋に広がった。彼は手の平にたっぷりと油を垂らし、丁寧に温めるように擦り合わせるとシエルのドレスをゆつくりとめくり上げた。

純白のレースの下着に覆われた下腹部は雪のように白く、成熟した女性の特有の柔らかな曲線を描いている。シエルの心は恥ずかしさと恐怖で縮こまり、知らない男の手が触れるという現実を耐えようとしていた。

「ひゃっ……」

グラッセの指先が軽く触れた瞬間、シエルの身体はピクリと反応をした。

彼はゆつくりと下着を脱がせ、割れ目にそつと手を這わせ、温かい香油を丁寧に塗り込んでいった。シエルの無垢な身体は触れられるたびに敏感に反応し、心とは裏腹に熱を帯び始める。

（今日、初めて会った人に触られて……怖い……）

知らない男への不安と儀式の重圧が彼女の心を切なく揺さぶる。グラッセの指が秘部の入り口を確かめるように何度か往復し、やがて中へと侵入してくるとシエルの身体は異物感に震えた。

ただただ彼との未知の繋がりに怯えながらも、儀式の運命に身を委ねるしかなかった。

（気持ち悪い音……）

真つ白な部屋に響く、くちゅり、くちゅりという湿った音がシエルの耳に容赦なく届く。耳を塞ぎたい衝動に駆られたが神聖な儀式を汚すわけにはいかないとシエルはぎゅつと目を瞑り、震える心を抑え込んだ。純白のウエディングドレスを着た彼女の身体は緊張でこわばり、氷の精霊の加護を受けた冷たい手がシーツを握りしめている。

グラッセの指が一本、また一本と増えるたび、シエルの身体に鋭い痛みが走った。

だが、先ほど塗られた甘い香りの香油に含まれる媚薬の効果が痛みを徐々に別の感覚へと変えていく。不思議なことに身体は熱を帯び、痛みの中に快楽が混じり始めた。

「あっ……うっ……」

吐息混じりの声が漏れると、シエルの心は羞恥と混乱で揺れた。

グラッセは不安げに彼女の顔を窺いながらも儀式を進めるために手を止めなかった。

彼の視線がシエルの心にさらに重くのしかかる。

（そこ……やだ……なんか、変になる）

グラッセの指がある一点を擦った瞬間、シエルの身体は今まで知らなかった感覚に襲われた。

恐怖と戸惑いが心を支配し、頭がおかしくなりそうな予感に震えた。快楽の兆しが強まるにつれ、彼女の心は抵抗と受け入れの間で揺れ動いた。

「んっ……ああっ……」

彼の親指が陰核をそつと弄るとシエルの身体はびくんつと大きく跳ね、強い快感に目の前がチカチカした。初めての絶頂に彼女の心は恐怖と驚きでいっぱいだった。

知らない感覚に翻弄され、身体が反応してしまいう自分に切なさがかみ上げる。

グラッセはシエルが達したことに安堵したように息をついたが、儀式はまだ終わっていないかった。彼がズボンの前を寛げると怒張したものが現れる。

「な、なに……？」

まだ頭がぼんやりとする中、グラッセがシエルの両足をそつと持ち上げ、左右に大きく開かせた。無垢な秘部に彼の熱く固いものが押し当てられた瞬間、シエルの身体は凍りついたようにこわばった。熱い感触が入口に触れ、恐怖と羞恥で我に返る。

「力を抜いてください」

グラッセがそう言うが、シエルの心は緊張で張り詰め、力を抜くことなどできるはずもなかった。「ご、ごめんなさい……入れても、大丈夫です……」

シエルの声は震え、痛みへの怖さと儀式から逃れられない現実を飲み込むように呟いた。

早く終わってほしい、ただそれだけを願うシエルの言葉にグラッセは静かに息を吐き、彼女の切ない覚悟を受け止めたようだ。彼はゆっくりと慎重に挿入を始めた。

そして処女膜を突き破る瞬間、鋭い痛みがシエルを襲い、その身体は硬直した。

泣きわめきたい衝動を抑え、唇を噛みしめながら耐えたが、痛みは予想以上に切なくシエルの心を締め付けた。それでも、シエルは儀式を果たすためにただ耐えるしかなかった。

全てが入り切った瞬間、グラッセはシエルの顔をそつと窺った。その瞳には涙が浮かび、辛そうな表情が痛々しく映っている。

「姫……動いてもよろしいですか？」

グラッセの声は低く、気遣うように響いたが、余裕のなかったシエルは震えながら、こくりと小さく頷くしかなかった。

グラッセは最初、ゆつくりと慣らすように腰を動かした。シエルは痛みと圧迫感に耐え、苦しげな息が漏れた。

「いつ……うう……ぐっ……ふえ……」

突かれるたびにシエルは痛みと戦いながらも、儀式を終えるために必死に耐えていた。

グラッセもまた、シエルの狭い肉壁に締め付けられながら、彼女をこれ以上、傷つけないよう慎重に動き続けていた。彼の心はシエルの痛みに寄り添いながらも、儀式を全うしなければならぬ責任感に揺れていた。

(痛い……早く終わって……)

シエルの心は痛みと恐怖で張り詰め、息をするのもやっとだった。

頭の中はただこの儀式が終わることを願う思いでいっぱいだ。純白のウエディングドレスに包まれた身体は冷たいシートの上で震え、手は痛みを耐えるようにシートを強く握りしめたまま。

それでも、ふと視線を下に落とすとグラッセの様子が目に入った。彼の額には汗が滲み、荒々しい呼吸が彼の胸を上下させていた。

さっきまで落ちていた雰囲気を変えていた彼の必死な姿にシエルの心は驚きと切なさで揺れた。(こんなに……頑張ってるんだ……)

自身の腹の中で、彼のものがさらに大きくなるのを感じた瞬間、子宮口をぐりゅつと刺激する強烈な感覚がシエルを襲った。ピリリと走る痛みがシエルの身体は硬直したが、同時に今まで感じたことのない深い快樂が心と身体を揺さぶった。

「ひゃあん！……ああっ！」

痛みと快樂が混じり合った声が漏れた。

シエルの心は知らない感覚に翻弄され、恐怖と混乱でいっぱいだ。

「くっ……」

グラッセもまた、小さく呻き、彼女の膣壁が急に強く締め付ける動きに耐えきれず、中に吐き出してしまった。

ドクンドクンと脈打つ彼のものから放たれる精液の生暖かさにシエルの心は一瞬、嫌悪感で縮こまった。だが同時にじんわりと身体の奥を満たす不思議な感覚が広がり、彼女の心を複雑な感情で揺さぶった。

痛みと快樂、恐怖と安堵が交錯し、シエルは何も考えられないまま、ただその感覚に耐えた。

グラッセがずるりと自身を引き抜くと彼女の秘部から血と混ざった白濁の液体が流れ出し、周囲の神父や使用人たちが息を呑む音が静かな部屋に響く。

(終わったの……?)

ようやく解放された。儀式は終わったのだ。後は子が宿ることを祈るだけ。

そう考えるシエルの心は疲れ果て、身体も精神も限界を迎えていた。

彼女の瞳には痛みと切なさで滲んだ涙が残り、冷たい手はシーツを握ったまま、シエルは深い疲勞に飲み込まれ、そのまま静かに眠りに落ちた。

◇

グラッセ・ラッセル。

公爵家の五男として生まれた彼は、五男ゆえに幼い頃からずっと期待をされずに育ってきた。

両親は兄妹たちにはばかり愛情を注いでいた。家を継ぐための教養やら婚約者やらを与えられずに生きていけるのは正直、気楽だったが、それも今日で終わりである。

『シエル姫と結婚し、子供を作れ』

それが両親に与えられた初めてであり、唯一の命令だ。

彼が氷の精霊の加護を持つ姫の花婿に選ばれた理由は、優秀な魔法の使い手であり、公爵家の人間だからだそう。

氷の精霊の加護は、親から子へと引き継がれる。そして、加護を得た子供は強大な魔力を受け入れる器になるので、優秀な魔法使いを親にした方が都合がいいらしい。

普通なら名誉なもののだが、グラッセとしてはこの結婚は不届である。

グラッセは恋愛には興味がなく、これまでも何人もの女性からのアプローチを避けてきた。そのせいで女嫌いの氷の魔法使いなどと呼ばれるようになったが気にしてはいない。

それに、魔法騎士として生きる中で、恋愛に溺れ、判断を誤り、身を滅ぼしていった同僚を何人も見てきたこともあったから、生涯独身のまま魔法騎士として生きていくつもりだった。

実力をひたすら伸ばして、誰よりも優秀な魔法の使い手になるために努力を重ねていたが……今回はそれが仇になった。

親から頼まれた縁談なら断っていただろうが、今回は王命だ。逆らうことは許されない。

仕方なく結婚したが、この結婚には前もって条件が付けられていた。

それは二年経つても子供が出来なければ離縁するというもの。二年間、夫としての務めを果たしても子供が出来なければ、種なしの烙印を押されるもの、晴れて自由の身になれる。

つまり独身に戻りたいなら、二年間、避妊を徹底して子供ができないようにすればいい。

しかし、想定外のことが起こった。

今まで社交界に出てこなかった妻になる女性——シエルは透き通るような白い肌にホワイトブロンドの髪、宝石のように綺麗な瞳、まだ幼さは残るものの美しい容姿をしていた。

彼女の見た目はグラッセが想像していた以上に可憐だったのだ。結婚の儀ではじめてその姿を目にした瞬間、決心が揺らぎそうになったぐらいいだ。

だが、グラッセは負けたりはしない。

絶対に離縁をして、老後まで独身を貫くと決めたから。

無事に儀式を終えたグラッセは決意を更に固めると、ずるりと柔らかくなった自身を引き抜く。儀式を見守っていた神父たちが息を呑む音がしたが、気に留めることもなくグラッセは自分の身

なりを涼しい顔で整え始める。

「姫が目覚めるまで休ませよう。教会に空いている部屋はないか？」

「失礼します。シエル様を起こし、屋敷へ戻られた方がいいかと」

神父にそう尋ねると、後ろで控えていた眼鏡をかけた男がそう進言した。

黒い髪に黒い瞳、年齢はグラスセよりも少し年上に見える。

「貴様は？」

「シエル様にお仕えする執事のクリアです。旦那様のお世話も任されております。どうぞ、よろしくお願いいたします」

クリアと名乗る執事は深々と頭を下げた後、グラスセと目を合わせた。

その目は冷たく鋭かったが気にせず話を続けることにする。

「クリア、少しだけ休ませてもいいだろ。俺も彼女ほどではないが疲れているんだ。それとも屋敷で誰か待っているのか？」

「シエル様が外に出ることを陛下はよく思われていませんので。儀式が終わり次第、早く屋敷に戻るようにと申しつかっております」

無表情で淡々と話すクリアに対して、グラスセは苛立ちを覚えながらシエルを抱き抱える。

その身体は思ったよりも軽く華奢であった。成人したばかりの女性とはこんなにも軽いものなのかと少し驚いた。

「責任は俺が取る。早く部屋に案内してくれ」

外は寒い。初夜を終えたばかりのシエルを無理やり起こして雪ソリに乗せるなどグラスセには出来なかったのだ。

シエルを大事に抱えながら、グラスセは神父の案内で教会内で一番良い客室へと足を踏み入れた。メイドにシエルの着替えを任せ、彼女をベッドに寝かせると、今は安らかそうな顔をしていた。

その姿を愛おしいと思ったのは、彼女が自分の妻となったからだろうか？ と疑問に思いながらも、グラスセはベッドの端に腰掛けてシエルの頭を撫でる。

化粧を落としたのにその美しさは変わらない。むしろ素顔の方が魅力的だと思えるくらいだ。

（俺は本当に結婚をしたのか……）

まだ実感がわかない。

そもそもグラスセは恋愛に興味がないし、幸せな家庭というものを知らない。

どのみち二年後には離縁する予定なのだから、それまでは良い夫を演じればいい。

パチパチと暖炉の中で燃える薪の音を聞きながら、グラスセはシエルの様子を観察した。

まだ部屋の中が寒いのか、シエルは体を震わせていた。

（困った。このままでは風邪を引いてしまう。何かあればこちらの責任になる）

「……仕方ないな……夫婦だ。別にいいだろ」

自分に言い訳をしながら礼服の上着を脱ぐとシエルの隣に入り込み、その細い身体を抱きしめる。起きる気配がないことに安心をしながら、彼女の体温を、柔らかさと匂いを感じ、トクントクンという心臓の鼓動を聞く。

この愛情のない結婚の行く末は、まだ誰にもわからない。

◇

シエルが薄っすらと目を覚ました時、目の前には端正な顔立ちの男の顔があった。

先程、夫になったばかりの男——グラッセが何故か一緒のベッドの中で眠っているのだ。

「……ひえ……」

驚いて離れようとするがガッチリとした腕で抱き寄せられているため身動きが取れない。

どうしてこんな状況になっているのかわからず混乱していると、彼が起きてしまった。

「……………」

「……………」

無言で顔を見合わず二人。

しばらくしてグラッセがシエルから離れてベッドから抜け出し、礼服を身に纏う。シエルも身体を起こして辺りを見回すと、見知らぬ部屋にいることに気がついた。

「ここはどこですか？」

「教会の客室です。姫が……私が疲れていたので、少し休憩をさせていただきました」

グラッセは、シエルの問いに答えながら扉を少し開けて、部屋の外で控えているメイドに声を掛けていた。

先に疲れ果てて気を失ったのはシエルだったのに、グラッセは気を遣って自分が疲れていたということになってくれたのだ。なんて優しい人なんだろう。シエルはそう思いながら侍女に着替えを手伝ってもらい、淡い水色のドレスの上に温かいベージュ色のコートを着た。

「グラッセ様、そろそろ戻りましょう。ソリの準備ができております」

クリアの呼びかけに、シエルは藍色のコートを羽織ったグラッセに肩を抱かれたまま、ゆっくり廊下を歩き出す。

そして教会を出る前にもう一度だけ振り返ると、ステンドグラスに描かれた天使の姿を見つめる。

(綺麗……)

それはフロレーシア王国に伝わる伝説——この国を守るという、真っ白い翼を持つ水の精霊を描いたもの。美しいだけでなく強い力を持ち、フロレーシア王国の守り神と崇められている存在。

そんな精霊の加護をシエルが受け継いでいる。

そして、それを次世代に繋ぐために自分は子を産まなければならない。

それが自分の役目なのだ。

◇

雪の上をトナカイが走る。トナカイが引いている屋根の付いたソリの中では沈黙が続いていた。何を話せばいいのか、お互いにわからなかったのだ。しかし、いつまでも黙っているわけにもい

かない。そう思った時、勇気を出した様子のシエルが口を開いた。

「あの、旦那様とお呼びすればよろしいでしょうか？」

「……え、ああ……はい、それで構いませんよ」

隣で黙って座っているグラッセが戸惑いながらも返事をする、シエルはパッと笑顔を見せた。まるで花のような可憐さがある。

「ありがとうございます。私のことはシエルとお呼びください。敬語もいりません」

「わかりまし……わかったよ。シエル」

グラッセはそう言うのと外の景色を見てため息をつく。そんな自分の仕草をシエルが不思議そうに見つめていることには気づいていたが、何か聞かれることもなく。

いつの間にかソリは、シエルが暮らしていた……そしてこれから、二人が暮らすことになる屋敷へと到着した。

屋敷は王城のすぐ近くの高台にある豪邸（ごうてい）であった。広い庭があるが、雪が一面に敷き詰められているだけで殺風景な景色が広がっている。

屋敷の玄関前にたどり着くとグラッセは再びシエルに手を差し出した。シエルはその手を取り、ゆつくりと降りてくる。ふわりと淡い水色のスカートがコートの下で広がった。

シエルの亡き母親はこの屋敷で愛人として贅沢（ぜいたく）三昧（さんまい）に暮らしていたと伝え聞いていたが、その娘——シエルは質素で清楚な雰囲気を持つ少女であった。

屋敷の中も寂しいもので、調度品も最低限のものしか置かれていない。

グラッセは想像とは違う部屋の様子を眺めながら、クリアの案内のもと屋敷の中を歩いていた。シエルはすでに侍女たちに連れられて行き、今はクリアと二人きり。

それ故か、クリアは言葉を選ぶことなくシエルの置かれていた立場を説明していく。

どうやら、国王と王妃はシエルと一緒に暮らしたくはないと思いつつも、目の届く範囲での生活を望んでいたらしい。そのせいで彼女はずっとこの屋敷に軟禁（なんきん）状態となっていた。

精霊の加護持ちだから大切にされているのかと思ったが、実際は愛人の子供として冷遇（れいぐう）されていたようだ。そんな立場で精霊の加護を受け継いだ上に、母親を亡くしてしまったのはシエルにとつて不運だっただろう。

さらに言えば、冷酷で女嫌いな氷の魔法使いとして有名な自身との結婚も、シエルに対する嫌がらせだったのかもしれない。少なくとも彼女の幸せは二の次だったはずだ。

この結婚は精霊の加護を次世代に引き継ぐためのもの。

子供を産んでしまえばシエルはお払い箱で、その後はどこに行くのかはわからないが、この屋敷から追い出されることになるのかもしれない。

（そうなれば、やはり俺が引き取るのか？）

冗談じゃない。このまま王家の思惑通りに子供を作ってしまったら、念願の生涯独身生活どころかシエルを引き取って面倒を見ることになるかもしれないのだ。

やはり、二年間子供を作らないようにして離縁するのが最善の方法である。

「こちらがシエル様の寝室になります」

クリアが一つの部屋の前で止まると扉を開ける。

中に入ると大きな天蓋付きのベッドが目に入った。今、部屋の主はいないようだ。

「俺の部屋は？」

「ここです」

ガラスセの質間にクリアが即答する。それを聞いたガラスセは顔を青ざめさせた。

どうやら自分は、強制的にシエルと同じベッドで一緒に眠ることになるようである。夫婦が同じ部屋で過ごすのは当たり前のこととはいえあまりにあらさまで、ガラスセは最悪な気分になった。だから嫌なのだ。結婚をするのは、自分だけの時間を、自由を奪われ、おまけに見た目が最高に良いだけで、大して愛情もない六つも年下の女と子作りまでしなければならぬ。

しかし、王家からの打診とあれば断れないのが貴族というものだ。

もし断ったとしたならば、自分だけではなくラッセル家に迷惑を掛けることになってしまう。

「では、ごゆっくりお休みくださいませ」

クリアは頭を下げると部屋の外へ出ていった。ガラスセは大きな溜息をつくと着替えを始める。

今から寝るには時間が早いのが、今日は色々ありすぎて疲れたのだ。

今頃シエルは風呂に入っているはずだ。彼女が出てくるまでに眠ってしまおうと着ていた服を脱ぎ、用意されていた黒い夜着に袖を通す。

そしてさっさと横になろうとベッドシートに触れた瞬間だった。

（質が悪い……！）

外見だけは高級感漂うベッドだがシートの材質は快適とは言えない代物である。

これは明日にでも買い替える必要があるだろう。

◇

その頃、シエルは侍女に手伝ってもらいながら湯浴みを終え、身体を拭いていた。

身体が乾くと、侍女の一人が用意していたネグリジエを恭しく差し出した。

それは純白の絹で仕立てられた上質なもので、袖口や裾には繊細な雪の刺繍があしらわれていた。首元は緩やかに開いており、華奢な鎖骨のラインがわずかに覗く。

シエルの白い肌に同化するように神聖な印象を与える衣である。

侍女たちは無駄のない手つきでそのネグリジエを彼女の肩に通し、腰のあたりを軽く結んで整えていく。布が滑らかに身体を包み込んだ。

そしてシエルが鏡台の前に座ると、背後に立つ侍女が長く艶やかなホワイトブロンドの髪を丁寧に櫛でとかしていく。

（夜は、するのかな……）

結婚式で一度、体を重ねたが、今夜も同じように抱かれるのかと思うと少し憂鬱になる。

また、あの時みたいに痛みを耐えなければならぬ。

だが自分がガラスセとの子を産めば、それは国のためになるのだ。そう思えば我慢できる気がし

てきた。

今まで、ただ生きているだけで、王女としてはもちろん、父からも何かを求められることはなかった。それが突然必要とされ、しかもそれは国の未来のためにできることだと思おうと嬉しい気持ちもある。そう思うと耐えられるような気がした。

シエルは準備を終えるとグラッセが待つ自室へと向かった。白の夜着に身を包んだシエルが部屋の前に立つと、案内をしてくれたクリアがグラッセからの入室の許可を得て扉を開いた。

「入りますね」

ベッドに腰掛けていたグラッセはシエルの声を聞いて視線を上げるが、なんだか不機嫌そうに見える。何か気に触ることがあったのだろうかと不安になった。

「旦那様、どうかございました？ どこか具合の悪いところがありますでしょうか……？」

「いや、大丈夫。それより寝よう。疲れただろう」

「え……」

グラッセは首を横に振ると、そのまま何もせず眠り始めたではないか。てっきりこのままキスなり、なんなりされると思っていたので拍子抜けしてしまう。

「手袋は外さないのか？」

ベッドに入ったあと、不意にグラッセの声が響いた。

シエルはわずかに肩を揺らしながら、そっと視線を彼に向ける。無表情だけど、問いかげの声音にはわずかな関心と柔らかさが滲^{にじ}んでいるように感じられた。

「……私の手、冷たいんです。氷の精霊の加護のせいだと聞いています」

そう言いながら、シエルはゆっくりと片方の手袋を外した。薄いシルクの布が滑るように肌を離れ、白く、透き通るような手が現れる。指は細く長く、しっとりとした滑らかさを湛えている。

その表面にはどこか儚さがあった。まるで、触れば消えてしまいそうな、硝子^{ガラス}のような手。

「みんな、私が触れると凍ってしまうかもって。そう言って、避けるのです。だから普段はずっと手袋をしています」

その言葉を紡ぐシエルの声はかすかに震えていた。

まるで心の奥に押し込めていた寂しさが、声の端々から滲み出してしまったかのように。

シエルはすぐに表情を取り繕い、小さな笑みを浮かべる。けれどそれは微笑みというよりも、諦めに似た自分で自分を慰める^{なぐさ}ような、哀しい笑顔だった。

誰にも手を伸ばされず、抱きしめられることもなく過ごしてきた日々。

自分の手が冷たいせいで、拒まれてしまうことに何度も心が軋んだ。

クリアを含めた使用人たちは彼女に対して無礼な態度を取ることにはなかった。言葉遣いも丁寧で、決められた仕事をきちんとこなしてくれる。

だが、いつもどこかには壁があった。必要以上に関わろうとはせず、微笑みも形ばかりのもの。

誰もが一歩引いた距離を保ち、まるで触れてはいけない何かを見るような視線を向けてくる。

シエルにとって、それはいつしか「当たり前」になっていた。

本当の意味で誰かと心を通わせた記憶は彼女の中に一つも残っていない。

(私はそういう存在だから)

何度もそう言い聞かせて、傷つかないようにしてきたのだ。

「……………」

グラッセが上半身を起こし、無言のままシエルの手をそとと取る。驚いたシエルは息を呑んだ。だが彼はそのまま指先に触れ、掌を包むようにして静かに重ねてくる。

「確かに、冷たいな」

ぽつりと呟いた声は怖がることも、拒むこともない。

まるでそれが自然であるかのように彼はその冷たさを受け入れていた。

(こんな風に誰かに触れてもらったの、初めて)

シエルの頬が染まる。今まで自分の手をこんなふうによく触れてくれる人はいなかった。グラッセの手が自分の手に重ねられているという事実。彼の温もりを感じるのとドキドキする。

それからベッドで眠っているもののお互い背中合わせで離れている状態だ。

正直、儀式ですでに抱かれており、受け入れた時の痛みや疲れが残っているので、これ以上の行為は遠慮したいと思っていたシエルとしては幸いだった。

グラッセが気遣ってくれたのか、それとも女として魅力がなく、気に入られなかったのか……後者ならなんとかして自分から動かなければならない。……子を得るために。

そんなことを考えながら、シエルはいつの間にか深い夢の世界へと誘われていったのだった。

二 氷の魔法使いとの新婚生活

翌朝、シエルは目覚めると自分が何かに抱きついてることに驚いた。温かくてたくましい胴体は男性のものに違いない。恐ろしくなって顔を上げれば、そこにいたのは自分の夫になった人。

「おはよう、シエル」

「……………」

「……お、はよございます」

グラッセは眉間に皺を寄せていたが、シエルが起きたことに気がつくのと微笑んだ。それにシエルは驚きながらも挨拶を返す。まさかこんな朝を迎えるとは思ってもいなかったのだ戸惑ってしまう。今まで、誰かと一緒に眠るなんて経験をしたことがなかったのだ。

慌てて彼から離れてベッドの上に座り込むとシエルは顔を赤くしながら俯く。

「昨日はよく眠れたか」

「はい……おかげさまで、よく休めました」

シエルは疲れて眠ってしまったが、反対にグラッセはあまり眠れていないのか目の下にクマができていた。それでも優しくシエルに笑いかけてくれる。

「そうだ。寝具を新調したいんだが、シエルは問題ないだろうか？ 寝心地が悪くてな」

「あ、だから旦那様は寝不足気味なんですね……なるほど」

「……ああ」

「私はいいのですが、そういったことはクリアに聞いてみてください。私がお願する時は、まずクリアを通して、最終的には国王陛下の許可をいただかないと実行できない決まりになっているんです。ですから……私の一存では、何も動かせなくて」

シエルが苦笑するとグラッセはベッドから出て着替え始める。その様子を見て自分も起きなければと思い、シエルはベッドから出て、侍女を呼ぶためのベルを押したのであった。

◇

眠れなかったのは、別にシーツのせいじゃない。多少の好みはあるにしても、寝ようと思えば床でも十分に眠れる。騎士団の訓練では、もっと過酷な場所での野宿も経験してきたのだ。

原因はシエルだった。無意識だったのだろう、彼女は眠ったままグラッセに身を寄せ、しまいは柔らかな胸元を押し当ててきたのだ。だから目が冴えて寝れなかったのだ。

(引き剥がして、離れて寝ればよかった)

ようやく朝日が差し込み、起き上がってしまった今になって、そんな当たり前の選択肢が頭をよぎり、支度をしているシエルの背中を侍女越しにちらりと見る。

彼女は今、純白のネグリジェから昼の装いへと着替えようとしている最中だ。

侍女たちの手によつて袖を通されていくのは、フローレシア王国の姫らしい気品を湛えたドレス。

淡いアイスブルーの生地には銀糸の刺繍が施され、首元には薄く広がるフリルと、小さな宝石が縫い込まれている。腰には細く編まれたリボンの装飾。裾には雪の結晶を模したレースが重ねられ、歩くたびにそれがふわりと揺れて、まるで雪の精霊のように映える。

長いホワイトブロンドの髪も丁寧に梳かれ、結われた後ろ髪には銀のかんざしが添えられていた。あまりに清らかで、触れれば溶けてしまいそうな存在感。

(気を持たねば)

グラッセは小さくため息を吐き、疲れたような顔をしながらも、どこか耳まで赤く染まっていた。

◇

夫婦になって迎える初めての朝。シエルは胸を弾ませながら朝食の席についた。

雪を思わせる白いテーブルクロスに、美しく並べられた朝の料理たち。彩り豊かに盛られた皿の数々を見て、それだけで心が華やぐような気がした。

目の前の夫は黙ったままフォークを手にしていた。彼の表情は硬く、どこか浮かないようにも見えたが、まだ朝だからかもしれないと思い直して、シエルは微笑みを浮かべた。

「いただきます」

シエルは小さく言つて、一口、口に運ぶ。グラッセも黙って黙々と食べている。

少しでも彼に気に入ってもらいたくて、笑顔を崩さぬように頑張っていた。

(お食事中はお話はしない方がいいのかしら?)

それでも食事の時間が終われば、何か会話があるかもしれない。

それから食後の紅茶を口にしながら、グラッセがようやく口を開いた。

「料理人を変えてくれないか? でないと、俺は……ものすごく離縁したくなる」

「ええっ……」

まるで時間が止まったように、声が出た。けれど、それ以上が続かない。

その言葉があまりにも重く、冷たく、胸に突き刺さった。身体が震えた。

手にしていたティーカップがぐらつき、カチャン、と鈍い音を立ててテーブルの上に落ちた。

初めての朝、せめて少しでも楽しい時間になるようにと願っていたのに。

「すまない、言い方が悪かったな。ただ、この料理があまりにも美味しくないんだ。俺が言いたいのはそれだけだ。シエルは何も悪くない」

「そうですか……よかったです……」

「シエルは、あれが普通だと思ってるのか?」

「はい。いつも通りです。お味も、特に変わったようには……」

シエルは素直な感想を伝えた。それでも、自分が何か間違ったことを言ってしまったのではない

かという思いに取りつかれ、不安がよぎる。

「……なるほど。つまり、シエルにとっては普通なんだな。あの味が」

グラッセは額に手を当てて小さく息を吐いた。

「……なるほど。つまり、シエルにとっては普通なんだな。あの味が」

「はい。いつもとそんなに変わらないと思います」

「……そうか」

彼の声には呆れと、どこか哀しみすら混じっていた。

「俺にとつては非常事態だ。空腹を満たすどころか、体力が削られるような食事だった。あれでは、

戦場に出る前の騎士の朝飯としては致命的だ」

「そうなのですか……料理人が作るものだから、きつと良いものなのだと……」

それがシエルの世界のすべてだった。愛されずに育ち、選ぶことを知らず、ただ与えられるまま

に受け取ってきたもの。そこに疑問を挟むことすら許されない、受け身の人生だったから。

一方でグラッセは耐えられなかった。食事だけでもまともなものを食べられるなら、他のことに

目をうつぶつてもいいと思っていた。だが、これは我慢できないレベルだと悟る。

彼にとつての食事は一日を快適に過ごすために必要不可欠なものなのだ。

それをないがしろにしてまで、例えば王命でも夫婦生活を続けるつもりはなかった。

「厨房キッチンを見せてもらえないか? 料理人の腕を確かめさせてくれ。誰がどのように作っているのか

知りたい。それと、使っている食材も」

「それは陛下に許可をいただかないといけません」

クリアが呆然としているシエルのこぼしたお茶を拭き取りながら答える。少し冷たい口調だった。

「そんなことにまで許可がいるのか」

「ええ」

静かにグラスセとクリアのやり取りを聞いていたシエルは、胸の奥が冷えていくような感覚を覚えていた。グラスセの表情に苛立ちの色が浮かぶたび、それが自分のせいのように思えて仕方なかったのだ。

(やっぱり、私のせい、なのかな)

手元に視線を落とす。

落としてしまったティーカップはすでに片づけられていたが、紅茶の染みはまだうつすらとテーブルクロスに残っている。その小さな痕が、彼女の心にもじんわりと染みを広げていた。

ずっと一人だった。食事はただ、空腹を満たすための手段でしかなくて。誰かと一緒に笑いながら食べることも、味に文句を言うことも、そんな当たり前前のやり取りをシエルは知らなかったのだ。グラスセは声を荒げたり怒鳴ったりはしない。

でもその分、静かな不機嫌さがじわりと伝わってきて、シエルの心をひどく不安にさせる。

声の抑揚、まなざしの動き、言葉の温度。

どれもがまるで自分が試されているように思えてならなかった。

昼下がりの陽が細く差し込む書斎の一角。

窓辺のレース越しに白い空を見つめながら、シエルは深く息を吐いた。

言葉を選びながら、ようやく小さな声で切り出す。

「クリア、旦那様のご機嫌が少し悪いように思うのです。どうしましょう」

彼女の向かいに立つ黒髪の実務は主の問いにすぐには答えなかった。整った横顔がわずかに伏せられ、手元の書類に視線を落としたまま、静かに筆を走らせている。

「ご機嫌、ですか」

数拍の間を置いてから、ようやく落ち着いた声が返ってくる。

「ええ、朝食のことです」

不安を隠しきれないシエルの声は少しだけ震えていた。

けれどクリアは顔を上げることなく、ただ淡々と、しかし優しさの混じった声で続ける。

「シエル様。ご心配はお察しますが、余計なことはなさらない方がよろしいかと」

「余計なこと、ですか？」

「はい。グラスセ様は理知的なお方です。ご自分の不満は必要があればご自分で対処されます。シエル様が気を揉んでも、かえってご迷惑になるかもしれません」

それはあくまで、客観的かつ王宮で生きる者としての言葉だった。

シエルは黙って、薄く唇を噛んだ。

「……でも、私は……何かできないかなって……」

「お気持ち立派です。しかし、我々は王命に従う立場。シエル様に求められているのは陛下の意向を損なわぬ振る舞いです。すべてはその上で考えるべきかと」

ようやく顔を上げたクリアの双眸は冷たくはなかったが、どこまでも冷静だった。彼はシエルに心を寄せる使用人のひとりではある。だがその忠誠心はあくまでも王に向けられている。

シエルは俯いて、小さく「……そうですわね」と呟いた。

『余計なことはなさらない方がよろしいかと』

クリアの忠告は耳に残っていた。確かに彼の言うことは正しい。王の意向に背かず、余計な混乱を招かないようにするのが自分の立場、それはわかっている。

求められているのは、氷の精霊の加護を継ぐ子を産むこと。

それがシエルに課された最大の使命であり、唯一の義務なのだろう。

けれど、それだけでいいのだろうかと彼女は思った。夫婦として関係を築いていく以上、ただ子を産む器のように扱われるのではない心はずれ心がすり減ってしまう。

頼まれていないことをしてはならないのはわかっている。

けれど、だからこそ、せめて夫には不快な思いをしてほしくない。

(私は……何もできないまま、ただ黙って見ているだけなの?)

自室に戻って、じっとしていられなかった。

自分のせいで不快な思いをさせてしまったかもしれない夫。まだ新婚で互いに知らないことだらけの距離。それでも、少しでも気持ちを近づけることができるなら。何か、ひとつでも。

そんな思いに突き動かされるように、シエルは厨房へと向かった。普段は足を踏み入れることのない場所。そつと扉を開けて足を踏み入れると、思いがけない人物の姿がそこにあった。

グラッセが、厨房の中央に立っていたのだ。

鍛えられた背筋を伸ばし、冷静な声音で料理長と何かを話している。調理台の上にはいくつかの

皿と調味料が並べられており、まるで料理の指導をしているかのような雰囲気だった。

シエルは一瞬、立ち止まる。息を詰めるようにして、彼の様子を見つめた。

気づかれないよう引き返そうかとも思ったその時。

「そこにいるのはシエルか？」

着いた声ですぐに彼女を見つけ出した。

振り返ったグラッセの視線が、まっすぐにシエルを捉える。

「あ、はい……ごめんなさい、勝手に……」

「いや。来てくれてちょうどよかった」

そう言っただけは料理長との会話を中断し、シエルの方へと歩み寄ってきた。

その顔はどこか穏やかで、朝とは少し違って見えた。

「新しい料理人を迎えようと思っている。今朝の食事の件もあってな。シエルはそれでいいか？」
予想外の問いに、シエルは一瞬言葉を失った。

てっきり、すでに決められたことをただ伝えられるだけだと思っていたから。

(私に選ばせてくれるの?)

それだけで、ほんの少し心が温かくなった気がした。

「はい。旦那様がそれで少しでも気持ちよく過ごせるなら私はそれがいいと思います」

「そうか。ありがとう」

グラッセは微かに目を細めて頷いた。まるでその返事に安堵したような表情だった。

「それから、しばらくの間は俺が食事を作ることにする」

そう静かに言ったグラスセの言葉に厨房の空気がピンと張り詰める。

料理長をはじめ、年配の料理人たちは皆、顔を伏せた。

「旦那様、それは……」

シエルが戸惑いを含んだ声で口を開く。

まさか夫が自ら厨房に立つなどと、思いもよらなかったのだ。

「最低限の料理くらいはできる。まあ、味については保証しないがな」

冗談めかした口調ではあったが、グラスセの表情はどこか苦々しさを含んでいた。

◇

実際、グラスセは料理は得意ではなかった。軍務の合間、野営で食事を用意する必要があったため、多少はこなせるというだけだ。

だが、それでもこの料理よりはまだマシだと思ったのだ。

「……申し訳ございません」

絞り出すような低い声で、料理長が頭を下げた。

白髪交じりのその背は、以前よりも少し丸くなっている。料理長はこの屋敷に長く仕えてきた古参の者であり、シエルがまだ幼い頃から変わらず厨房を預かってきたという。

しかし、年月は確実に腕を衰えさせる。味覚も感覚も、かつての鋭さは既に失われていた。グラスセは料理を口にした瞬間、それを直感的に理解した。

そして同時にそんな料理に慣れてしまっているシエルの無垢な笑顔に胸を締め付けられた。

「新しい料理人が来るまで俺の飯で我慢してくれ」

そう言っつて、グラスセは袖をまくり調理台の前に立った。

使用人たちは未だ戸惑っていたが、誰一人としてそれを止めようとはしなかった。

むしろ、その背に宿る責任感に気圧されていたが、現実はそう甘くない。

「これで作れと言うのか……」

食材庫を開ければ、傷みかけの野菜、異様に脂が多い肉、香りの抜けた香辛料ばかり。

そう、この屋敷にはもう一つの問題があった。

王宮の台所とは違い、こちらには劣った食材ばかりが回されてきているのだ。質の良い食材は他家や宮中へと優先的に送られ、ここには鮮度の落ちた肉や野菜ばかりが押し付けられていた。

食材を見たグラスセは眉をひそめた。

それでも、彼は諦めなかった。魔法騎士としての訓練と並行して履修していた戦地での野営知識、保存食の扱い方、素材の活かし方。

それらの知識を総動員しながら、なんとか自分自身が納得できる一皿へと仕上げていく。決して美味とは言えない。だが、少なくとも食べられるものにはなっていた。

グラスセは、つい笑みを浮かべる。

その姿を、シエルは黙って見つめていた。
白く細い指を胸の前でそっと組み、目を伏せて微笑んで。

◇

夜も更け、寢室の蝋燭の灯りが静かに揺れている。
窓の外では夜風がそよぎ、重たげな静寂が二人を包んでいた。
シエルは白い夜着を身にまとい、ベッドの端にちょこんと腰を下ろしていた。純白の布地は淡く光を受けて揺れ、彼女の華奢な輪郭を際立たせている。

隣にはグラスセが黙って腰を下ろしていたが、その瞳はどこか遠くを見ており、今夜もやはり何か考え込んでいる様子だった。

言葉がなくても、隣にいただけで心臓の音がやけに大きく響く。

シエルは何度か唇を開きかけては閉じたが、やがて意を決したようにそっと声を発した。

「あの、今日の夕飯、とっても美味しかったです」

そう言うと、シエルは小さく微笑んだ。その声は静かで温かく、どこか遠慮がちだった。

（こんなにも、私のためにしてくれる人が、いたなんて）

今日の食事はシエルにとつて忘れられない一皿だった。

「私、ああいう味って初めてだったので、ちょっと感動してしまいました。旦那様は料理もお上手

で凄いです！」

グラスセの横顔がふいにシエルの方へと向く。彼の眼差しに鋭さはなく、ただ静かに揺れる光を映すそれは、何か確かなものを探しているようだった。

「……そうか。なら、よかった」

短くそう返す声は低く、けれどどこか安堵が滲んでいた。

シエルはその一言だけで、今日一日ずっと張り詰めていた心が、ふっと軽くなるのを感じた。

「本当ですよ？ 私、あんなにおかわりしたの、初めてだったかもしれない」

冗談めかして笑ってみせると、グラスセの唇がほんのわずかに緩んだように見えた。シエルは気づかなかつたが、その笑顔がグラスセの胸に小さな波紋を広げていた。

「あの、新しい料理人の方って、どんな方なのですか？」

グラスセは少しだけ眉を寄せて考え込み、やがてゆっくりと口を開く。

「そうだな……少し変わった経歴の持ち主だ」

それだけで興味を惹かれる。シエルはそっと身を乗り出すようにして続きを促す。

「もともとはこの国の出身じゃない。異国から旅をできていた男でな、フロレーシアに来る前に魔物に襲われかけたところを偶然、俺が助けた」

「助けたのですか……！」

「そいつは礼にと言って料理をふるまってくれたんだ。驚いたよ。見た目は粗末なものだったが、とにかく美味かった」

グラッセの声に、僅かな熱が宿る。滅多に感情を表に出さない彼にしては珍しい反応だった。

「そいつは下町の小さな食堂で働くようになった。貴族の俺がああいう場所で食事するのは本来ならおかしいことだが……」

「そこでお食事をするようになったのですね」

「まあ、そうだ」

「でも……その方をこの料理人にするって……大丈夫ですか？」

「……ああ、それはわかっている。国王を説得するのは時間がかかる」

そう答えながらも、グラッセの瞳の奥には別の思惑が見え隠れしていた。

まるで何かを隠しているような。

「もう遅いな」

「は、はい」

しかし彼はそれ以上を語ろうとはせず、ベッドに横になる。

シエルもそれ以上深く追及はしなかった。

だが、彼の言葉と、どこか遠くを見るような目が胸に残る。

（今夜も、何もないのかな）

今夜もグラッセはシエルに触れることなく、静かにベッドの片側に横たわってしまった。

寝室はやけに広く感じられる。シエルは掛け布の下でそっと手を握りしめた。

一度だけ儀式で触れ合った。あの時は痛みばかりが強くなり、優しさや愛しさのようなものは、

正直なところ、よくわからなかった。それでも。

（もしかして……私では嫌？）

氷の加護を持つ身体。冷たい手。家族からも使用人からも距離を置かれて育った心には、好かない理由の種がいくつも植えられている。

（今、私が手を伸ばしたら……何か、変わるのかな）

グラッセの寝息が静かに聞こえる。けれど怖い。もし、その手を振り払われてしまったら。そう思うと、身体は布団の中で小さく縮こまり、指先すら動かせなかった。

——近くて遠い夜から数日。

風の音に混じって時折ふわりと雪が舞い込んでくるような静かな朝だった。

静かに、けれど確かに新しい空気がこの場所に吹き込もうとして、厚手のカーテンが揺れる広間の中には暖炉の火がぼちぼちと心地よい音を立てていた。

その前に立つグラッセの隣には見慣れない男が一人。

黒髪に茶色の瞳を持ち、熊のようにがっしりとした体格をしているものの、その笑顔はどこか人懐っこさを感じさせた。

淡い色合いの上着に身を包み、手には真新しい厨房用の皮手袋が握られている。

「シエル、彼の名前はアサヒだ。今日からこの屋敷では、彼を中心に料理を作ってもらおう」

いつも通りの落ち着いた口調でそう言ったグラッセだったが、その声の奥にはどこか張りつめた

ものが滲んでいた。

やや俯き気味のその姿から、彼がどれほど神経を使ったのかが言葉を介さずとも伝わってくる。王宮へ使いを立て、許可を得るまでにどれほどの時間がかかったのか。許しが下りるのがどれほど難しかったのか。そのすべてが今この場に立つ一人の料理人の姿に凝縮されているような気がして、シエルは自然と胸を押さえていた。

「アサヒです。これからこの屋敷の料理人として、精一杯頑張ります」

ぺこりと頭を下げるその姿に彼の誠実さが滲んでいる。

シエルはそっと微笑み、自然と膝を折って、軽く会釈を返した。

隣でクリアは難しそうな顔をしていた。

「アサヒ様はどの国の生まれですか？」

その瞬間、アサヒは一瞬だけ言葉に詰まり目線を泳がせた。

シエルはそれに気づき、首をかしげる。

「あ、それは……」

「彼はずっと東の方にある小国の出身だ」

困ったように言葉を濁すアサヒの横で、グラスセが静かに口を開いた。その低く落ち着いた声にアサヒはハッとしたようにグラスセを見上げ、そしてすぐに頭を下げた。

「はい、そうなんです」

「……そうですか」

動揺をするアサヒとクールな顔で相槌を打つグラスセ。

二人の様子を見て何か事情がありそうだと感じたのか、クリアはそれ以上は聞かなかった。何も聞かれなくなったことでホッとしたのか、二人は肩の力を抜いて安堵のため息をついた。

そして夕食の時間。

シエルとグラスセは早速食卓についた。

テーブルの上にはいつもとは違った珍しい料理ばかり並んでいる。

「これはなんですか？」

「ロールキャベツというものです。肉をミンチ状にして作ったものをキャベツで包んで煮込みました。お口に合うかどうか、わかりませんが……」

シエルが初めて見る料理を不思議に思い尋ねると、アサヒがにこやかに答えた。

「美味しい……こんなに美味しいお肉は初めて食べました」

シエルは恐る恐る一口食べ、すぐに顔を綻ばせた。

キャベツの甘みとトマトの酸味と肉汁が染み込んだスープが絶妙なハーモニーを奏でている。ミンチにした肉は臭みもなく柔らかい。今まで食べたことがないほど上品な味わいだ。思った。

「そうだろう」

彼女の言葉に安心したのか、グラスセも自慢げに料理に手をつけ始める。

自分で作ったわけでもないのにとても偉そうだ。

「で、でも、旦那様が作ってくださいましたお料理も美味しかったですよ」

「……そうか」

シエルが慌ててフォローを入れるとグラッセは照れくさそうな表情を浮かべる。

アサヒが来るまでの間ははずつと、グラッセが自分で厨房に立つて苦勞をしながら食事を作っていたのだ。アサヒにはかなり劣るが、それでも食べたことがないくらいに美味しく、シエルは喜んでその料理を食べていた。

なによりも、夫が試行錯誤しこうごくごをして作ってくれたのだから嬉しくないはずがない。

シエルは、幸せな気持ちで料理を口に運び続けた。

◇

食事を終えしばらく経ち、グラッセとシエルは自室に戻った。

シエルは満足げで、グラッセもなぜかその様子をみて不思議な充足感を得ていた。

この屋敷の食材は、健康には害はないが質が悪く、そのままでは食べにくいものばかりだった。

まるで庶民が食べるような、もしかするとそれ以下の食材。それらをアサヒが工夫して、美味しく食べられるようにしたのである。

こうして、新しい料理人のおかげで——ちなみに前の料理人は、シエルの頼みで解雇かいこはせずにアサヒの助手として残っているのだが——食事の質は改善されたのだった。

次にグラッセが手をつけたのが、寝具だ。

元のものは安物なのか、固くてクツション性が全くなかった。姿勢は良くなりそうだが、これだと疲れた身体を休めることが出来ない。

こちらも国王の許可を得て、ようやく新調することができた。

「まあ、とてもふかふかですね」

シエルは、さつそく取り寄せたベッドに触れると、あまりの気持ちよさに驚いた素振りを見せた。彼女はこれまでずっと固いベッドの上で眠っていたので、柔らかいマットレスに戸惑っている。

「旦那様、ありがとうございます」

「ああ、今まで自分で買い替えようとはしなかったのか？」

グラッセが疑問に思ったことを尋ねてみると、笑顔を浮かべていたシエルは少し困った様子を見せる。

「考えたことはありませんでした。与えられるもので今まで元気に暮らしていましたし」

安い食材に寝心地の悪いベッド、彼女の姉である王女が着古したドレス。

シエルにとってそれらに囲まれるのは当たり前前の生活であり、それが幸せだと感じていたのだ。

だから、与えられたものを素直に受け入れ、満足していた。そんな彼女の姿を見てグラッセは心を痛めたが、それを表に出さないように努め、なるべく明るい声で聞いた。

「何か欲しいものはあるか？ 俺が買える範囲のものなら用意するが」

「欲しいもの？ 今は思いつかないですね」

外の世界を知らないシエルには欲しいものが思いつかない。何も望めなかった。シエルは笑顔のまま遠慮をする。

その顔を見てグラッセは、彼女を可哀想に思った。だが、ここで同情しても何にもならないと自分に言い聞かせた。

——ある日のこと。

「グラッセ様、シエル様との夜伽よとぎをされていないようですが、どうなされたのですか？」

二人しかいない執務室で本棚を眺めているとクリアから淡々とした口調でそう聞かれたのでグラッセは驚いた。寝た後のベッドを調べてそう判断したのであろう。

「シエルが……まだ痛むだろうから、無理をさせるのは良くないと思つてな」

グラッセは言葉を濁しながら答える。

子供を作るのが彼の役目、何もせずに二年間やり過ごすのは王命を無視することになる。

シエルの体を労わるフリをして、彼女を言い訳に使った。

「でしたらシエル様に薬を塗って差し上げればいいのではないのでしょうか？」

「それはメイドにやらせればいいだろ」

「後でお渡しします」

有無を言わせない態度でそう告げたクリアが部屋から出て行くと、グラッセはため息をついて椅子に座つて窓の外を見る。今日のフローレシア王国は珍しくいい天気だった。

◇

夜の静けさが屋敷全体を包み込む中、シエルはふわりと薄いピンク色のネグリジェを身にまとつて、そつと寝室の扉を開けた。

屋間に何度も鏡の前で確認したそれは、少し透けるほど薄く繊細な生地で、彼女の白い肌をやわらかく引き立てている。胸元には可憐なレースがあしらわれており、裾はふわりと膝まで。

シエルなりに、思いきつて選んだ一着だった。

(色気がないって思われていたらどうしようって)

そう思つてこのネグリジェを選んだものの、今さらながら頬が熱くなる。

「シエル、今日は」

「は、はいっ……」

寝台の傍に立っていたグラッセが低く声をかけると、彼女の肩が小さく跳ねた。

あの儀式以来、二人の間にそういった夜はなかった。けれど夫婦である以上、そろそろそういうこともあるのではと、内心構えていたところだった。けれど夫婦である以上、そろそろそういう

(もしかして、このネグリジェが効いたのかも)

そんなことを考えて、ソワソワと指先をもじもじさせながら、ベッドの上に向かい合つて座る。シエルが恥ずかしさを堪えきれず俯く中、グラッセはクリアから貰った軟膏なんこうを懐から取り出す。

「塗ってやるから足を開くんた」

「ぬ、塗る？ 葉をですか？」

「まだ痛むだろう、子供を作るのはもう少し先だ」

その声は安心させるように優しく、どこか余裕を感じる。シエルは拍子抜けしながらも心を許し、ゆつくりと頷き、ネグリジェの裾をそっと整え、恥ずかしそうに視線を落とす。

「ん……じゃあ、失礼、します……」

シエルの声はほとんど囁きに近く、緊張で指先が小さく震えている。

一度深呼吸をし、ゆつくりと膝を緩めた。

ネグリジェの裾がふわりと揺れ、その下に隠された繊細なレースのショーツがちらりと見える。

そのショーツは、シエルがこの夜のために密かに選んだものだった。

純白の生地に、繊細な花の刺繍が施された愛らしいデザイン。普段は実用的なものを選ぶが、夫との親密な時間を意識して、少しだけ気合を入れた下着を選んでいたので。

ネグリジェの裾から覗くその姿に、シエル自身も気づかぬうちに心臓がドキドキと高鳴る。

「ずいぶん可愛いものを穿はいているじゃないか。気合がはいってる」

「そ、そんな……ただ、たまたま、です……」

グラッセは優しく微笑み、彼女の恥じらいを愛おしそうに見つめる。

すると、彼はそっと手を伸ばし、ネグリジェの裾を軽く持ち上げた。

「治療のために脱がせるぞ。いいな？」

シエルは一瞬躊躇したが、こくりと頷いた。

グラッセの指がゆつくりとショーツの縁に触れる。彼の指先がレースの繊細な感触に伝わり、シエルの肌に軽く触れた時、彼女は小さく息を呑んだ。

グラッセはまるで壊れ物を扱うように慎重にショーツを下ろしていく。

純白の生地が彼女の白い肌を滑るように離れ、膝ひざのあたりまで下ろされると、シエルは恥ずかしさで思わず膝を閉じそうになる。

だが、グラッセの手が優しく彼女の内腿うちももを撫で、落ち着かせるように囁く。

「大丈夫だ、シエル。怖いことなんて何もない」

その言葉に、シエルは再び膝を緩め、グラッセに身を委ねた。

ショーツは完全に脱がされ、ベッドの端にそっと置かれる。その繊細な刺繍がキャンドルの明かりに照らされ、ほのかに輝く。

シエルは自分の選んだ下着がグラッセの目に留まったことを意識し、恥ずかしさと同時にどこか誇らしい気持ち湧いた。グラッセはそんなシエルの様子を見て、満足げに微笑むと、冷たい軟膏を指先に取り、そっと彼女の内腿に触れた。

「んっ……」

シエルは小さな声を漏らし、慌てて唇を噛む。冷たい軟膏が肌に触れた瞬間、体は敏感に反応し、わずかに身を縮こませてしまった。

だが、グラッセの手は急がず、ゆつくりと円を描くように軟膏を馴染ませていく。冷たかった感

立ち読みサンプルはここまで

触はすぐに温かさに変わり、シエルの緊張がほぐれるにつれて、体も少しずつリラックスしていく。グラッセの指がさらに敏感な部分に触れると、シエルはビクッと小さく反応し、恥ずかしさに目を閉じた。頬は真っ赤に染まり、呼吸も少し速くなる。

グラッセはその様子を見て、本当は塗ったらすぐに止めるつもりが、つい意地悪を試みたくなったのだ。

「奥もしつかり塗らないと、な」

「あつ……そこは」

割れ目を開いて奥の方まで軟膏を塗り込むと、シエルの身体がビクッと震える。

そのまましばらく弄いじっている、次第に湿り気をおびてきて滑りが良くなった。

「そこ……だめですつ……あつ」

さらに激しく責めると、シエルは我慢出来ずに甘い喘あえぎを上げ始めた。グラッセはそれに構わず続ける。すると、秘部から愛液が流れ出しシーツの上に染みを作った。

「シエルは感じやすいな。ほら、こんなになっている」

そう言って彼女に濡れた手を見せつけると、羞恥で真っ赤になったシエルは慌てて目を逸らす。

「そ、そんなこと、ない、です……」

「嘘をつけ、これでも否定するのか」

グラッセは反論するシエルを無視して、今度は直接陰核に触れた。軽く撫でただけでシエルは腰を浮かせて反応を示す。軽く摘つまむ度に彼女は悶もたえ——全身に電流が流れるような快感に襲われた。

「ひゃつ！ あああつ！！ 旦那様、ごめんなさい……私、なんてことを……」

「いいさ、別に怒っていない」

あつけなく達してしまったシエルは、粗相そそうをしてしまったのかと勘違いをしたようだ。

怯えながら謝ってくるが、あえて訂正を入れずグラッセは再び彼女の下腹部に手を伸ばし、ゆっくりと動かし始めた。再び快楽を与えると、シエルは身体を震わせ後ろに倒れ込みそうになったので、グラッセは咄嗟に背中を支える。

「ふう……あつ、あつ」

「いい顔、するじゃないか……」

口から漏れ出す吐息を抑えられないのだろう。シエルの顔はすでに蕩けきっていた。

グラッセは自分の胸に寄りかかる彼女の耳元で囁き、首筋に舌を這わせる。

その瞬間、シエルはゾクりと身をよじらせた。

「はう……」

「気持ち良いか？」

「はい……とても……幸せです……んっ」

シエルは、与えられる悦楽に身を委ねていた。

儀式の時に比べて羞恥心は増しているのに不思議と嫌悪や不快感は消えていた。むしろ夫に抱かれていることが心地よく感じるようになっていたのだ。

「あつ、あん……胸は……」